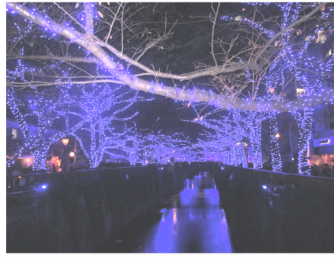




●青いイルミネーションに  
ありがとう

目黒川沿いの桜並木に青一色のイルミネーション。  
川をはさみ青い洞窟のようで、思わず大勢の人から、口々に「わあきれい」と歓声が上がリ、携帯を出して、皆さん写真を撮り始めます。すると警備の方が「止まらないで歩いてください。」と大きな声をかけますが、その美しさに見惚れて、誰も動けないよう見えました。  
まるでおとぎの国にある青い洞窟に迷い込んだような、そんな不思議な気持ちになり、我を忘れて、楽しんでいました。  
本当にきれいなイルミネーション、ありがとう。



(大田区/E・K)

●七五三を迎えた娘に  
ありがとう

娘の七五三のお祝いをしました。  
思えば三才の時はまだまだ小さくて、疲れた、だっこと言ったり、あめをなめさせ、だましましたよと神社でおはらいをしていただきました。  
あれから四年、七才になった娘はずい分成長して、着物、かんざし、手提げも自分で気に入ったものを選び、当日は午前8時に美容院で髪を切って着付けをしていただき、お姉さんになったようです。  
写真館、神社、親類とホテルでお食事会、実家に寄り、みんなにお祝いをしていたとき、家に帰ったのは午後五時。苦しいと言いなながらも一日着物を着ていた娘。我慢ができるようになって偉かったね。これからも健康で明るく育つよう祈りました。



(川崎市/H・N)

●「山六」眉毛に  
ありがとう

私は高校生頃まで、太くて存在感のある眉毛でした。  
卒業して、新宿にある医科大学に勤めるようになり、同じ課の女の子たちは、私の眉を心配して、お昼休みに、私の眉を少しずつ細くきれいな眉に整えてくれました。眉を抜いたその後は、白くて変でした。  
お盆に帰省した時に、親戚が「山六まゆげ」と言って、山六は眉が立

派なんだよと教えてくれました。「山六」とは、私の実家の屋号でした。  
「きみまる」ではないが、「あれから四十年」いや五十年以上を過ぎた、太い眉も白髪まじりで薄くなり、なかなか良い眉になっていきます。  
七十五才になる私は、昔を思い出して、太くて立派な「山六」眉毛を書いてみたら、おかしくて笑いが止まらなかつた。  
消えそうな細い眉毛と一緒に年を重ねていきます。  
(中野区/S・Y)

●錦秋に遊ぶ子らよ、  
ありがとう

夏が去り、朝夕めつきりと冷え込むようになると、木々たちは緑色の夏の装いから、色鮮やかな赤や黄などのゴージャスな色へと衣替えを始めます。  
そんなある日、快晴に誘われて「世田谷美術館」へ出かけました。バスを砦(きぬた)公園緑地入口で降りると、目の前には秋色に染まった公園が広がっています。  
幅広の歩道が遠くまで続き、その両側からは赤や茶色に彩られた、桜や、クヌギ、ケヤキの高木が道に沿って生い茂っています。  
落ち葉を踏みながら、美術館の近くまで行くと、そこからは子どもたちの大きな声が聞こえてきました。そしてその周囲は、眩いばかりの金色の世界がありました。その輝きは美術館の前庭に立つ大きなイチョウの木から放たれ、見上げると紺碧の空からキラキラと吹雪のように葉が

舞い降りてきます。それを受取るうと幼い二人の女の子が声を上げながら、両手を高くしてピョンピョンと跳ねているのです。傍らには、その二人を優しく見守る若いママの笑顔がありました。  
この、ほっこりした光景は、大分以前、長い間にわたり「週刊新潮」の表紙を飾った谷内六郎さんの描くファンタジーそのものでした。  
その後、美術館で多くの作品を観て回りましたが、その前に見た落ち葉に戯れる女兒らの印象の方がいつまでも心に残っています。  
老いた爺に元気をくれたお嬢ちゃんたち、ありがとう。  
(世田谷区/H・A)



●展示会にありがとう

もみじが真っ赤に色づき、もみじの根元に千鉢の菊の花が飾られた徳宝寺の秋の花まつりに、お人形教室で一年かけて、良寛さんと子供達の手まり遊びをしていいるお人形を作製しました。  
毎年、高崎のデパートで一週間、展示会がありますが、今年初めて晩秋に、浄土の世界が広がる徳宝寺の豊のお部屋が開かれました。  
畳のお部屋は、日本人形展示にはピッタリで、50点のお人形も喜んでいるようでした。  
連日大勢の人でにぎわい、作品を見ていただき、ありがとうございました。  
(高崎市/M・Y)



●田舎の味であじがたり

寒くなってきたせいか、母はベッドの上の生活が多くなりました。御飯の時は椅子に移りますが、一人ではできなかり、妹たちの手を借りながら、三食(常食)をしつかり食べています。大好きな白菜の漬物があればいいと言っていました。冬は白菜がおいしいから好きだと言います。



稲刈りもそば刈りも終わり、田んぼはお休みに入りますが、畑には白菜・大根・ねぎ・ほうれん草・春菊と、これから寒くなるとおいしくなっていくます。母を見ながら、働きの妹は白菜漬にも精を出していました。いもがらも干し柿も軒下に昔と同じように干してありました。「田舎の物だから、少しずつ楽しみながら食べなよ。」と、帰る時に持たせてくれます。母世話もしながら、妹はすっきり田舎のおばちゃんです。妹に感謝しながら、ほっこりとあったかい思いで埼玉の家に戻りました。ありがとう。(春日部市/H・N)

●母娘の会話で

ありがとう

先日の朝早く、湘南電車に乗りました。土曜日だったので座ることが出来ました。うたた寝をしていると、次の上尾駅で乗って来た二人の女性が私の前に立っています。70代と40代の母娘のよう



でした。

会話で、高尾山と耳に入ってきたので目が開きました。「あと10年したら80才になるから、高尾山には行けないね。」と母親。「今日はゆっくり行こうね。」と娘さん。お母さんの後襟などを直してあげています。「帰りは、新宿で降りて、歌舞伎町の区役所前においしいお店があるから、食べて帰ろうね。」と娘さん。母親は「高尾山を降りた所にも、おいしいおそば屋さんあったね。」二人は、高尾山の紅葉を見に行くのでしょうか、新宿駅で降りていきました。

楽しそうな親子の会話に、私の痛みも軽くなったようです。ありがとう。(稲川市/K・G)

●温かい肌着をありがとう

朝夕が大変寒くなってきました。週一回、買い物をしてくれるヘルパーさんが、我が家に自転車に乗って来て、「寒くなりましたね。」と言うと、「これ着ていましたね。」と言うと、「これ着ていますよ。」と見せてくれます。何と、オレンジ色のシャツを着ています。見るからに暖かそうです。「これは、ヒートテックで、着ていると熱を逃がさないのです。ズボン下もはいています。具合がいいので、主人にも娘にも着せています。もしよろしかったら、買ってきます。」と喜んでくれました。私は「足や膝が冷えるので、都合のいい時に、ズボン下をお願いいたします。」と言いました。駅の付近は、自転車を止めることはできません。一駅ですが、バスで行くというので「本当についていければで

いいので買ってきて。」と言いました。次の週、早速、ズボン下を買ってきてくれました。はいてみると、軽くて暖かいのです。腰周りも膝も足首もポツカポツカ。その事を伝えると「もし、他の物もご利用になりたいなら、声をかけてください。」と言ってくれました。親切に買い物をしてくれたり、声をかけてくれたヘルパーさん、ありがとうございます。これから寒い時期を迎える季節、シャツやズボン下をはいて、お互いに、風邪を引かないように過ごしましょう。(目黒区/H・O)

●生まれ育った町に

ありがとう

電車の時刻表も見ないで、久しぶりに田舎に向かいました。駅の広場にゆっくりたり着いた時に電車は発車し、この後電車が来るまでの一時間、駅の周りをゆっくり眺めようと思いました。



駅から南の方角の山に、ひとときわ黄色い銀杏と赤やオレンジに色づいた紅葉が見えました。菩提寺である永源寺のある山です。紅葉と銀杏の間からお寺の屋根が小さく少し見えました。子供の頃、父と一緒に来たお寺、帰り際に懐紙に包んだお菓子をもらいました。おいしくておいしくて、ほっぺたがおちそうだったことを思い出して、胸が熱くなりました。電車を1時間待ったお陰で、生まれ育った町をゆっくり眺めることができました。(さいたま市/M・K)

【携帯Deシヨット】

見合い件数2千組の実績を持つプロの仲人さんから、西の市の養祥地という足立区花畑の『花畑大鷲神社』(主祭神:日本武尊)を教えていただいた。平安時代後期の武将源義光が後三年の役のおり当地で見た鷲のおかげで戦勝した...と。二の酉の日の光景です。



- 携帯電話の方はQRコードから →→→
●パソコンの方は下記のURLから ↓
http://1039.seesaa.net/
●メールでのご投稿は...
info@holonics.gr.jp



【編集・企画】株式会社ホロニックス総研・編集部

【原稿をお待ちしています。】

本誌は北海道から沖縄までの友人知人から寄せていただいた「ありがとう」のこぼれに、因んだ思ひ出を、作文、詩、俳句、短歌、写真、絵画などを掲載します。作品は編集部までお送りください。投稿いただく方には、ささやかなご挨拶ですが、オリジナル「ありがとうマガネ拭き」をプレゼントさせていただきます。皆様からのご投稿をお待ちしております。また、ご自分のお名前や事業所名を刷り込んで、身近な方やお客様へ配布されては、いかがでしょうか。編集へのご意見やご提案がございましたら是非ともお聞かせください。

